

## 九州大学の英語新カリキュラムとCALL科目の導入

鈴木, 右文  
九州大学大学院言語文化研究院言語環境学部門・言語情報学

<https://doi.org/10.15017/6796466>

---

出版情報：言語科学. 42, pp.1-11, 2007-03-31. 九州大学大学院言語文化研究院言語研究会  
バージョン：  
権利関係：



# 九州大学の英語新カリキュラムとCALL科目の導入

鈴木 右文

## 1 はじめに

九州大学では英語のカリキュラムが2006年度から改訂された。本稿は、概略を見渡した上で、ねらいや施行初年度の状況について考察し、今後の大学英語教育の向上に資することを目的とする。中でも全面的にCALLを導入した英語科目（英語ⅡB、英語ⅢB）について紙数を割く。但し、すべての記述は個人としての見解であり、言語文化研究院や同英語科の公式なものではないことをお断りしておく。また、英語を第1外国語として選択した場合に必修となる科目の履修に限っての考察であり、言語文化研究院でこれまで取り組んで来ている自由選択枠や、大学院での英語教育、オンライン英語学習システムの運営、国際英語検定試験による単位の認定、1学年全員に対する国際英語検定試験の実施、学部とタイアップした試験の実施・教材開発、海外英語研修等については他の機会に譲る。

## 2 旧カリキュラムの概要

詳細や厳密さを多少犠牲にしてわかりやすくコンパクトに記述すると、英語を第1外国語として選択した場合の卒業所用単位数は文系で7、理系で6であり（学際系の21世紀プログラムは除く）、以下のような履修体系を持っていた。

表1 2005年度までの旧カリキュラム

	1年生前期	1年生後期	2年生前期	2年生後期
文系	2単位 英米言語文化演習Ⅰ 総合英語演習	2単位 インテンシブ英語演習Ⅰ 総合英語演習	2単位 英米言語文化演習Ⅱ インテンシブ英語演習Ⅱ のうちから2つ	1単位 英米言語文化演習Ⅱ または インテンシブ英語演習Ⅱ
理系	2単位 英米言語文化演習Ⅰ 総合英語演習	2単位 インテンシブ英語演習Ⅰ 総合英語演習	1単位 英米言語文化演習Ⅱ または インテンシブ英語演習Ⅱ	1単位 英米言語文化演習Ⅱ または インテンシブ英語演習Ⅱ

**英米言語文化演習Ⅰ**：指定クラスで受講、大人数制（60-80名）、共通教科書指定

共通教科書『*A Passage to English* 大学生のための基礎的英語学習情報』（第1版～第3版：九州大学出版会）を用い、これ以降の大学での英語学習の共通基盤として、英語の勉強方法や英語音声や作文・読解のための学習項目などを学び、英語の諸相や英語圏文化や新聞英語などに関する英文の読み物を読んだ。

**インテンシブ英語演習Ⅰ**：指定クラスで受講、少人数制（25-35名）、教科書は教員が決定  
発信型の演習授業で、英作文または対話演習が中心であった。開講内容は担当教員の判断に任されていた。

**総合英語演習**：指定クラスで受講、中人数制（40-65名）、教科書は教員が決定

四技能の同時開発を旨としていた。開講内容は担当教員の判断に任されており、実際のところ様々なタイプの授業が混在していた。

**英米言語文化演習Ⅱ・インテンシブ英語演習Ⅱ**：希望抽選制で受講、英米言語文化演習Ⅱは中人数制（50-70名）・インテンシブ英語演習Ⅱは少人数制（25-30名）、教科書は教員が決定

2年生の科目である。英米言語文化演習Ⅱとインテンシブ英語演習Ⅱをあわせて複数の選択肢の中から受講クラスを抽選により選択することができた。開講内容は担当教員の判断に任されており、2つの科目間の内容の違いは、受講者数にあわせて異なるというだけのものではなかった。

### 3 新カリキュラムの概要

旧カリキュラムにおける反省点の克服を目指して新カリキュラムが2006年度から導入された。旧カリキュラムの反省点とは以下のとおりである（筆者の私見）。

- 1) 同じ科目名でも内容が異質（英米言語文化演習とインテンシブ英語演習のⅠとⅡ）
- 2) 同一科目でも担当教員によって内容や評価方法がまちまち
- 3) ⅠとⅡのレベルの差が明確でない
- 4) 英米言語文化演習Ⅰが共通基盤構築をうたいながら1年後期に開講する学科もある
- 5) 学部の専門教育への橋渡しとしての学術英語への対応が不十分
- 6) 能力別クラス編成を実施していない
- 7) すべて一斉授業である
- 8) インテンシブ英語演習Ⅰが少人数制と言っても十分な少人数ではない

これに対し、新カリキュラムでは以下のように履修体制が改訂された。2006年度は2年生が旧カリキュラムに従うので過渡期ということになる。

表2 2006年度からの新カリキュラム

	1年生前期	1年生後期	2年生前期	2年生後期
文系	2単位 英語Ⅰ 英語ⅡA	2単位 英語ⅡB 英語ⅢA	2単位 英語ⅢB 英語Ⅳ	1単位 英語Ⅳ
理系	2単位 英語Ⅰ 英語ⅡA	2単位 英語ⅡB 英語ⅢA	1単位 英語ⅢB	1単位 英語Ⅳ

**英語Ⅰ**：指定クラスで受講、大人数制（60-80名）、共通教科書指定

旧カリキュラムの英米言語文化演習Ⅰと同じ考え方にに基づき、2007年度からは共通教科書『*A Passage to English* 大学生のための基礎的英語学習情報』（九州大学出版会）の抜本的改訂版で新著と言ってもいい第5版を用いる（2006年度は過渡期で旧版の第4版を用いた）。毎回客観式中心の部分共通式小テスト（共通部分は準備グループが用意する）を実施し、学習内容の定着を

はかる。採点はT A（ティーチングアシスタント）が行う。

**英語Ⅱ A**：指定クラスで受講、少人数制（20-25名）、共通教科書指定

学術的英作文に特化し、パラグラフライティングの訓練を行う。添削指導を3回以上実施することとし、プレゼンテーションも体験させる。教科書は英語科が年度ごとに指定するが、2006年度は *Reason to Write* (Longman) であった。成績評価は統一の方式で実施された。

**英語Ⅲ A**：能力別指定クラスで受講、少人数制（20-25名）、共通教科書指定

1年生全員に実施する国際英語検定試験の結果により能力別クラスを編成し、それぞれの能力にあわせたレベルで、学術的なエッセイライティングの訓練を行う。添削指導を3回以上実施することとし、プレゼンテーションも体験させる。英語Ⅱ Aの一段上位に位置づけられる科目。教科書は英語科が年度ごとに指定するが、2006年度は *Writing to Communicate* (Oxford) であった。成績評価は統一の方式で実施された。

**英語Ⅱ B**：指定クラスで受講、大人数制（50-140名）、共通教材指定

英語の受信能力の訓練に特化し、コンピュータ教室で実施。教員の指導のもとで各自が自分のペースでオンライン英語学習教材に取り組む。2006年度に採用されたのは「ぎゅっとe中級」（ぎゅっとeについては <http://gyuto-e.jp> 参照）で、リスニング・リーディング・文法を内容としている。成績評価は統一の方式で実施された。

**英語Ⅲ B**：能力別指定クラスで受講、大人数制（50-140名）、共通教材指定

2007年度から始まるため、能力別クラス編成は、本稿執筆時点でまだ手配されていない。英語の受信能力の訓練に特化し、コンピュータ教室で実施。教員の指導のもとで各自が自分のペースでオンライン英語学習教材に取り組む。英語Ⅱ Bの一段上位に位置づけられる科目。2007年度は「ぎゅっとe上級」が採用される予定。成績評価は統一の方式で実施される予定。

**英語Ⅳ**：希望抽選制で受講、中人数制（50-70名）、教科書は教員が決定

2007年度から始まる2年生の科目である。複数の選択肢の中から抽選によって受講クラスが決められる。開講内容は担当教員の判断に任される予定であり、これ以外の科目が共通指定教材を使用し、統一成績評価方式を採用しているので、教員の得意分野の個性発揮が期待される。

この新カリキュラムにおいては、前述の旧カリキュラムに見られた問題点が、以下に見られるように、かなり克服されている。

「同じ科目名でも内容が異質」:

旧カリキュラムでは英米言語文化演習Ⅰが大学での英語学習の共通基盤を形成する目的を持っていたのに対し、英米言語文化演習Ⅱは開講内容が教員の判断に任されていた。またインテンシブ英語演習Ⅰは発信型英語を旨としていたが（ネイティブスピーカーの教員は口頭運用に主眼を置き、日本人教員はライティングに重点を置くといったような偏りも一部に見られた）、インテンシブ英語演習Ⅱは実際のところ、少人数で鍛えるということが前面に出て、内容は必ずしも発信型とは限らなかった。しかし新カリキュラムでは、英語Ⅱ Aと英語Ⅲ Aはアカデミック・ライティングという共通の内容と共通の教科書を持ち、英語Ⅱ Bと英語Ⅲ Bはコンピュータによる受信

の訓練という共通の内容と共通の教材を持つようになった。しかし規格化が過度に進むと硬直したカリキュラムとなるので、近隣の高校の先生方からも「大学はもっと自由に」という声が上がっている（言語文化研究院主催の高大連携行事での懇談）くらいであり、英語Ⅳだけは、教員の得意分野を活かし、教員ごとに個性的で独自の授業を用意して、受講者に選択してもらう方式としている。

「同一科目でも担当教員によって内容や評価方法がまちまち」：

旧カリキュラムでは、英米言語文化演習Ⅰを除き、教科書や授業内容と成績評価の方法が担当教員の判断に任されていたため、受講者にとっては、どのクラスに指定されるかによって、単位取得上の負担が異なっていたり、どの技能に力点が置かれるかがばらばらであったりという問題があったのだが、新カリキュラムでは、英語Ⅳを除き、同じ科目ならどのクラスでも同じ教材を使用することとなり、成績評価のガイドラインも共通化され、かなり問題が解消された。英語Ⅰでは小テストも問題を部分共有するため、より一層の規格化がはかられている。こうした共通規格化は、受講者側からの不公平の申し立てが従来からあったことを踏まえたものであるが、2007年度から導入されるGPA制度（Grade Point Average）のもとでは、卒業証書のグレードが成績評価の平均評定値に基づくことになるため、学生間の公平がより一層求められることになるため、それに間に合わせた形である。英語Ⅳが例外になることは既述のとおり。

「ⅠとⅡのレベルの差が明確でない」：

旧カリキュラムでは、英米言語文化演習のⅠとⅡの差は、レベルの差ではなく、大学における英語学習の共通基盤形成と事実上何でも可という内容の区別に事実上なっており、わかりにくかった。インテンシブ英語演習のⅠとⅡも、Ⅰが発信型英語を内容としていたのに対し、Ⅱでは事実上開講内容が担当教員の判断に任されているも同然であったので、ⅠとⅡが同一の内容でレベルが異なるという形にはなっていなかった。これに対し新カリキュラムでは、英語ⅡAがパラグラフ・ライティング、英語ⅢAがエッセイ・ライティングとなっていてはっきりレベルで分かれており、英語ⅡBでは中級、英語ⅢBでは上級の教材を使用するため、やはりⅠ・Ⅱがレベルを表していきやすい。

「英米言語文化演習Ⅰが共通基盤構築をうたいながら1年後期に開講する学科もある」

表1には書き込まれていないが、旧カリキュラムでは、英米言語文化演習Ⅰが時間割の都合上、かなりの学部学科で1年後期の実施となり、そのかわりインテンシブ英語演習Ⅰが前期に実施された。前期に大人数制授業、後期に少人数制授業では開講数のバランスが取れなかったからである。これに対し新カリキュラムでは、英語Ⅰがすべて1年前期に開講される。なぜこのようなことが可能になるかについては、時間割作成上の複雑なテクニックなので割愛する。

「学部の専門教育への橋渡しとしての学術英語への対応が不十分」：

旧カリキュラムでは、芸術工学部、医学部保健学科、工学部機械航空学科が、英語科目の一部

を学部教員によりそれぞれの専門分野に絡めた内容で開講していたが、特に専門課程への橋渡しとして大がかりな取り組みはなかった。これに対し新カリキュラムでは、英語カリキュラム全体を学術英語を内容とするものと位置づけ、特に英語ⅡAと英語ⅢBでは、学術論文等を書けるようにするための基礎訓練として、アカデミック・ライティングの演習を少人数で実施している。上記の学部学科による専門英語の授業も継続されており、文学部、法学部、経済学部からは英語Ⅳ（2006年度は過渡期のため科目名が旧カリキュラムのものになっている）へ1クラスずつ教員が派遣されるようになった。

「能力別クラス編成を実施していない」:

正確に言うと、旧カリキュラムでも末期には能力別クラス編成を一部実施した。2年生の英米言語文化演習Ⅱ・インテンシブ英語演習Ⅱの選択制の授業で実施されたのだが、新カリキュラムでは、実施初年度後期から実施されている。7月中旬に1年生全員を対象にして実施されたTOEFL-ITPのスコアに基づき、2006年度後期の英語ⅢAが平均5段階程度の能力別クラスに編成された。続く2007年度前期では、2006年度後期に小規模に実施されるTOEFL-ITPによって英語ⅢBの一部が2段階の能力別クラスになる予定である。

「すべて一斉授業である」:

旧カリキュラムでは、どの授業も教員が進行にあたり、受講者ひとりひとりが自分のペースで学習を進めるということではなかった。しかし新カリキュラムでは、英語ⅡBと英語ⅢBがコンピュータ上でひとりひとりがオンライン学習を進めるので、英語能力の高低に関係なく、早く進める受講者はどんどん進み、時間が必要な受講者はゆっくり取り組める。いずれも他の受講者のペースを気にすることなく学習を進めることができるため、効率の高い学習ができているものと思われる。

「インテンシブ英語演習Ⅰが少人数制と言っても十分な少人数ではない」:

旧カリキュラムのインテンシブ英語演習Ⅰでは、少人数制と言っても25名から35名という受講者数であり、1週間のサイクルで添削サービスを実行するのは困難であった。新カリキュラムの完成年度である2007年度には、20-25名で実施できるようになる予定である。これならばかろうじて添削サービスが実行できる人数である。これは、英語ⅡBと英語ⅢBが大人数で実施することが可能となったために実現したことである。

但し、クラスサイズが小さくなくても、担当クラス数が増えれば添削を担当する負担は減らないわけだが、人数の少ないクラスがたくさんできると、従来担当していた教員以外が分担する可能性が高まるので、効果は大いにあるものと予想される。

## 4 全面的なCALLの導入

### 4. 1 教材

本節では英語ⅡBに焦点を当てる。この科目は2006年度後期に初めて実施されたわけだが、

採用された「ぎゅっとe」というオンライン英語学習システムは、2004年度後期および2006年度前期にも一部の授業で試行されており、とりあえず適切なシステムであるとの判断が得られ、導入されることになった。

コンテンツは広島市立大学で開発されている教材で、「広島市立大学の青木信之教授と渡辺智恵助教授によるIETW(Intensive English Training on the Web)プロジェクトの長年に渡る研究データと優れた学習効果(文部科学省による「特色ある大学教育支援プログラム」に採択)を継承し、より効果的な教材と学習システムの開発を実現するため、広島市産学官共同研究開発補助を受け2003年に始動し」(<http://gyuto-e.jp/school/index.html>)たプロジェクトによる成果である。リーディングとリスニングの初級、中級、上級にそれぞれコース1とコース2の2つの教材があり、この他文法にもコース1とコース2があるが、英語ⅡBでは、リーディング中級、リスニング中級のそれぞれコース1、文法のコース1が採用された(「ぎゅっとe」にはこの他スピーキングやライティングのコースもある)。因みに、英語ⅢBではリーディング上級、リスニング上級、文法のコース2が採用される予定である。

リーディングは、300語から400語の文章を読み、内容理解にかかわる選択式の問題を10題解くセットが40ある。読破速度も計測され、緊張した雰囲気の中での学習となる。TOEICで言うと450点から650点の学習者がターゲットとなっている。九大では概ね7割台の正答率で推移している。

リスニングは、TOEICの4つのパートに相当する選択式の問題がそれぞれ20問で計80問としたセットが10ある。TOEICで言うと400点から600点の学習者がターゲットとなっている。概ね8割台の正答率で推移している。

文法は、コース1として仮定法、完了形、関係詞、形容詞、助動詞、接続詞、態(能動態・受動態)、代名詞、動名詞、否定、不定詞、分詞、名詞が扱われた(コース2は動詞と文型、動詞と時制、比較、疑問詞と疑問文、話法、名詞構文・無生物主語、強調・倒置・挿入・省略・同格、冠詞、副詞、前置詞を扱う)。問題数は選択式421問で(コース2は319問)、詳しい解説が添えられている。概ね7割台の正答率で推移している。

#### 4. 2 管理機能

「ぎゅっとe」は授業での使用を前提とした学習システムであり、授業運営上の様々な機能を有している。教員が知ることのできることは、受講者個別の総学習回数、週あたりの学習回数(ログイン回数)、「週」は授業期間開始日として各教員が設定した曜日からの1週間)、週あたりの学習時間、消化問題数、ログイン履歴、学習履歴(各解答内容と正誤の記録)、クラス全体の各コース平均消化率、各問題の平均正答率、週あたりの平均ログイン回数、週あたりの平均学習時間などのデータである。この他九大全体での管理者(マルチアドミンと称し筆者が担当している)が受講者画面へ一斉掲示したり、各教員が担当クラスの受講者に一斉にメッセージを掲示したり(メッセージボードという名称。コミュニティ機能をオンにすれば受講者もメッセージを掲示することができるようになり、BBSとしても使用できる)、システム内で受講者と教員がメールのやりとりをしたりできる(設定次第で教員のeメールアドレスへ自動転送することもできる)。また、

受講者なら順番にしかできない問題も、教員ならどの問題も即時に閲覧できる。

### 4. 3 学習機能

受講者は、教室でまず教材に認証を経てログインし、メッセージボードやシステム内のメールを確認の後、教材画面へと移る。そこでサウンドチェックによりヘッドセットからの音量を調節し、リーディング、リスニング、文法のうちの好きなものから学習を開始する。いずれも問題を解いていく形式であるが、何%の問題が正解なら先に進めるかを教員が設定しておくことができる。解答次第では問題をやり直すことになるわけだが、やり直すことのできる回数の限度も教員が設定できる。九州大学では、リーディングの1つの文章に10の設定問があるところ7問クリアで次の文章へ進めるが、リスニングとリーディングでは各問正解しないと次へ進めないように設定しており、やり直しは1回だけとしているが、各担当教員が独自の設定をすることも設定次第で可能である。この他、リーディングには読破速度を計測する機能もあり、教員側の設定次第ではウェブ上のフリーの辞書へのリンクも利用できるが、九大では使用させていない。また文法には詳細な解説がついている。いずれの問題も、正解できなかったか、もしくは後で参照したい場合は、復習リストに登録しておくともたまた振り返ることができるようになっている（一定の条件を教員側が指定して自動的にリストに登録されるようにすることも設定次第で可能）。質問がある場合、授業中であれば直接教員やTAに尋ねればよいが、コンピュータ教室や自宅で自習中の場合は、システム内のメールを担当教員に出すことになる。

### 4. 4 授業方法

入学者は第1外国語に英語を選択した場合、原則として全員が1年生後期の英語ⅡB、2年生前期の英語ⅢBと2学期連続してウェブベースのトレーニングを積むことになる。但し2006年度後期は過渡期で、一部の学部学科の英語ⅡBでは紙の教科書を使用した。また、2年生前期の英語ⅢBは、医学部保健学科、工学部機械航空学科、芸術工学部では専門課程の英語科目をかわりに実施するため、そもそも開講されない。保健学科では同学期に「医用外国語学」か「医用英会話」、工学部機械航空学科では同学期に「技術英語」、芸術工学部では3年次に「学術英語」が開講される。

授業ではまず初回に、コンピュータ教室使用のマナー、コンピュータとぎゅっとeの使用方法についての説明を行い、各受講者にIDとパスワードを伝え、成績処理方法もあらかじめ伝えておく。成績は、平常点10%、教材消化率30%、中間試験30%、定期試験30%としている。教材消化率については、すべての問題を消化した場合は30点が与えられ、リーディング、リスニング、文法の平均で70%の消化率では0点、また例えば94%の消化率では24点となる。リーディング、リスニング、文法のいずれかで消化率が70%を切った場合は、単位の取得ができない（各コースは100%消化した場合、2巡目に入ることができる。但し正答率等の統計には1巡目のデータのみが反映される）。中間試験では、文法がぎゅっとeの前半210問から出題され、リーディングとリスニングについてはぎゅっとe外からの出題となった。定期試験ではリーディングとリスニングについても一部ぎゅっとeからの出題ができることとした。70%の消化率の他、単位の取得の

ための条件として、毎週最低2回の学習を課している。コンスタントに取り組んでもらうためでもあり、また学習時間の増加をはかるためでもある。大学の数単位の授業だけではどうてい実用レベルの英語力の達成はおぼつかないことは明らかであるが、かといって授業数を増加させることも難しいため、授業以外での学習時間の確保が必要だと考えている。ところが、授業初回に週あたりの学習回数の条件を伝えていたにもかかわらず、授業以外での学習を行わず、学習回数が2回未満の週が続く受講者が続出した。これに対しては、条件から著しくはずれる受講者に単位を与えないことを繰り返し伝えたため、歯止めがかかった。但し、週あたりのログイン回数でチェックしているため、授業中にいったんログアウト、ログインを行うと2回の学習としてカウントされてしまうし、中には授業時間後に1分だけログインして回数を稼ぐなどのごまかしの手法が次々と登場し、対応策が取れていない。

各授業では、最初の15分ほどで、正答率が低い問題の解説、データに基づいた学習の様子に対する指導などが教員からあった後、受講者が自分のペースで自習に取り組む。その場で質問があれば教員かTAに尋ねる。教員は、巡視の他、学習データの分析作業を行い、次回の指導内容を定め、到着したメールに対応するなどの作業を行う。

#### 4. 5 事前の準備

このような大規模なCALL授業の導入には、準備グループや各担当教員による事前の体制づくりが不可欠だが、大きく分けて3種類の準備が行われた。

1つは担当教員に授業進行について習熟してもらうことであったが、準備グループも同時に学習していく必要があったため、手探りで進めた。7月半ば、9月下旬と説明会を開催したが、思うように進まない面もあり、正直なところ10月の授業開始時点では、準備グループも含め、誰もがぎゅっとeの機能の詳細をきちんと把握できていなかったのであるが、授業の進行とともに徐々に慣れていった。2007年度からの授業では大丈夫だろうと思われる。

また、TAに対する事前講習会も2回にわたって行われた。TAには教室の端末のログイン方法、ぎゅっとeの操作方法等についての受講者からの質問に答えてもらう必要もあったため、IDとパスワードを発行して、事前準備として実際に学習してもらった。この講習会にはTA給与が支給された。

最も時期的にぎりぎりとなったのはCALL教室自体の整備である。これについては節を改めることにする。

この他、2006年度後期の英語ⅡBには、コンピュータ教室を使用せず、紙の別教科書を使用したクラスもあった。使用教科書については、準備グループが調査した上で候補が示され、担当教員がその中から選ぶという形であった。

#### 4. 6 CALL教室の準備

2006年度後期は過渡期のため、英語ⅡBは受講者数の6割程度しかコンピュータ教室を利用できなかったが、2007年度からは英語ⅡB、英語ⅢBが受講者全員に対してCALL教室で実施される予定であり、九州大学全学教育の実施上の都合により英語科目は一日平均2時限分しか開講

できないため、CALL教室の数の確保が至上命題だった。同時に最大5教室で実施することが必要とわかったため、従来からある第1LL教室の他、第2LL教室と第3LL教室もCALL教室化することとし、2006年9月に完成するぎりぎりのスケジュールで工事が実施された。第1LL教室は64名、第2LL教室はブース増により81名、第3LL教室もブース増により67名の定員とした。この他、全学教育に使用されるコンピュータ教室を2室（それぞれ定員50名、1室は2007年度から70名に増ブース）利用し、2006年度では合計312ブース、2007年度からは332ブース体制となる。

授業は最大5教室で実施されるが、開講クラス数としては3で、教員も3名のみの担当となる。5教室のうち1教室は教員1名による単独クラスだが、残る4教室は、2教室連結で教員1名が担当するクラスが2つということになる。2教室連結の場合は、教員の他にTAが配置され（2006年度では教員1名+TA2名の3名体制で、2007年度からは教員1名+TA1名の2名体制になる予定）、教室が無人にならないようにしている。また2教室連結の場合、授業時間冒頭での教員による解説指導部分は、片方の教室では授業時間の冒頭、他方の教室ではその後というように時間差を設けなくてはならず、一方の教室では、受講者の作業がいったん中断となる。

一言触れておきたいのは時間割である。英語科目の時間割は例年前年の11月中下旬に作業が行われるが、2006年度は過渡期で実施しない学部学科があったためにそうでもなかったけれども、2007年度の時間割作成にあたっては、同時使用5教室の収容人数をにらみながら適切な受講者数とするために、どの学部学科を組み合わせるか、他教科等との兼ね合いもあり、かなり難しい作業だった。このときまたま筆者が英語科時間割係であったため、何とか締め切りに間に合わせることができた。

サーバは業者側にあるが、教材の音声や画像等の重いファイルは九大内部にも設置した。学内で教材を利用する場合は九大内部のサーバのファイルを読み、学外で利用する場合（URLが異なる）は業者側サーバのファイルを読むことになる。

#### 4. 7 反省点と今後の展開

本稿執筆時点では、CALL導入後初めての英語ⅡBの13週の授業のうち11週ほどが終了しており、定期試験は実施していない段階であるものの、ある程度の総括・考察が可能と思われるので、試みてみたい。

この授業は学習時間の不足を抜本的に補うことを目的のひとつとし、授業以外での学習時間の確保をねらって、週あたり複数回の学習を受講者に課した。ところが、今ひとつ本気にしてもらえなかったのか、授業以外に学習しない受講者が少なからずいた。例えば筆者が担当した126名のクラスでは、第8週終了の時点で、1週でも学習回数が1回または0回の週がある者が112名いたので、問題のある週が全15週（年末年始等授業のない週も含む）のうち過半数の8回に達するようであると単位認定が難しいとアナウンスしたところ、クラス全体にエンジンがかかったが、それでも問題のある週が8を越える者が出た。また、学習時間のクラスあたりの平均を見ると、1週平均が75分程度で、授業で筆者が解説に使用した15分から20分程度の時間を除くと授業時間内だけで60分台の学習にはなっているわけで、思ったほど学習時間が確保できていないよう

である。上記過半数条件に引っかかりそうな複数の受講者からの申告内容によると、自宅にPCがなく、思うように学習できないということがあるようだが、CALL教室が昼休みに閑散としている実態を見ると、受講者側の意識不足も大きいのではないかと思われる。対策としては、授業初週から週あたりの学習回数や学習時間についての基準を具体的に定め、厳格に適用することである。但し、部活動の遠征や後期の場合の大学祭などもあるので、1週たりとも基準の逸脱を許さないとすると、実際問題受講者も困ることがあるだろう。また、あわせて英語学習には想像以上に時間がかかるということをきちんと担当教員が受講者に伝える努力をすることも必要である。一説にTOEIC 実用レベルの730点に達するまで、大学入学後正味1500時間程度の英語活動が必要だとも言われているくらいである。

単位認定のために設けたもう1つの関門である消化率70%については、単位取得を目指す受講者のたいていがクリアしそうである。こちらは週あたりの学習回数とは異なり、コンスタントな努力を求めたものではなく、最終的に帳尻が合えばいいという条件なので、比較的対応できる受講者が多かったのではないかと思われる。

学習状況を分析すると、リスニングと文法が比較的コンスタントに取り組まれているのに対し、リーディングは後回しになる傾向が強かった。恐らく、リスニングや文法が1問あたり1分もかからず、次の問題へすぐ移れるのに対し、リーディングではまとまった文章を読んで10問の設問に答えないと次の問題へ移れないため、敬遠されたと言えるのではないだろうか。リーディングについてもコンスタントに取り組むように指導を強化する必要があるだろう。必要なら授業期間途中でのコース間の消化率の差について関門を設けることもできるであろう。

受講者の中にはかなり意欲的な者も少なからずおり、授業期間半ばにして問題が1巡してしまうコースを持つ者も出始める。大いに学習しているわけであるから、遠慮するようには言えない。しかし2巡目に入ってよいと言っても、同じ教材をまたはじめから単純にやり直し、しかも週あたり2回の学習を課すということになると、むしろ個人の学習計画を邪魔する結果にもなりかねない。今年度に関しては、消化速度の抜群にはやい受講者に対しても週2回の学習回数は確保するよう指導したが、今後は早期終了者に対して追加的な学習内容が必要なのではないかと思われる。例えばNetAcademyを学習させ、学習状況に関して申告させるという方法もあるだろう。早期終了者には、交換留学を目指す者など、意欲的で自分で学習方針を確立している者が多いので、このような方法を採用しても、特に問題にはならないものと思われる。

解説等の時間を除けば、受講者が自己学習している時間に受講者との交流がないのだが、教員の中にはこのことを問題視する向きもあるようである。しかしe-learningは従来の授業とは全く別物であり、直接比較することは難しいと考えるべきだと思われる。また、コミュニティ機能をオンにして、メッセージボードをBBSとして受講者に利用させて交流を持つとだいぶ印象が変わるのではないかと思われるが、筆者以外の担当者がこのBBS機能を試行した例では、投稿はそう活発とは言えなかったようである。

2教室を連結して行われるクラスでは、教員の他TAが2名ついたが、最近の学生は端末へのログイン方法を知らないこともほとんどなくなり、授業中の質問も多くないので、1名で足りると思われる。但し2教室あるので、教室の監視要員がゼロになるのを避けるために、教員の他T

A 1名は最低必要である。

現在はまだ機が熟しているとは言えないが、受講者が軽量ノートPCを持ち歩くのが普通になる時代が来れば、定められた教室・時間に毎週来る必要もないと言える。法的にも遠隔学習による単位取得が認められているのであるから、学習時間等の条件をクリアし、授業で求める英語力を試験で確認できれば、単位認定は可能である。あとは学内規定等の整備だけ、という状態だと言える。こうなればCALL教室も不要であるし、授業時間帯の設定自体が不要になる。いっそのこと学習を休業期間中に設定すれば、大学の時間割編成にも利点が生まれるように思う。